



CAROLYN QUARTERMAINE

テキスタイル、インテリアに、ロンドンの新しい発想
マルチディレクター、キャロリン・クォーターメイン

ロンドンの自宅を離れ、パリの翌週は東京、その後はカンヌへ飛ぶ。彼女の仕事に
国境もテリトリーも境目がない。キャロリンは新しい形のクリエイターだ。

キャロリンがデザインしたテキスタイルで包んだルイ16世スタイルのいす。流水のような模様がオーガンディに染め出されている。

text : Masako Masaoka / photographs : Eric Morine
正岡雅子 = 取材



モザイクのテーブル上のガラスのオブジェは、アンティークのランプスタンド。ガラスのボールが重なったようなシェープと透明感が美しい。グレー、ペールグリーン、シルバーを基調にした部屋、淡い色のグラデーション、光を透かすイメージを追求している。カーテンのテキスタイルは彼女の作。仕事場と住いが浑然となっている。左下は仕事で訪れたフランス、コロンブ・ドールでの写真。



「私は自分のクリエイティブティを追求しているだけ。とてもシンプルなことなのよ」とキャロリン・クォーターメインは言うが、その仕事の幅広さは、およそシンプルどころのものではない。

ロンドン、ロイアル・カレッジ・オブ・アート卒業直後の初めての個展でリバティの社長に認められ、フロア全体のデコレーションを任されたのをきっかけに様々な出会いがあり、様々な仕事を手がけてきた。テキスタイルデザイナーやインテリアコーディネーション、ウィンドーデイスプレー、さらには、アレキサンダー・マックイーンのディレクターで友人のケイティ・イングランドから依頼されてジバンシイのオートクチュールに印籠のようなオベラバッグも制作した。

となれば忙しいのは当然で、クリスマス以降まったく休みなしの「ジェットコースターに乗ったままみたい」な日々だが、なぜかストレスを感じていないのは「新しい大きな仕事が入って来て、毎日がとてもスリリングだから」。パリの翌週は東京、ロンドンに帰ってすぐカンヌといった日々で、時差だけが抜ける暇もない。だから最近では、ロンドンの自宅のベッドで目を覚ますのが最高の贅沢



になっちゃった。ベランダから公園が見渡せる自宅兼仕事場のインテリアはもちろん、キャロリン自身のコーディネートだ。

淡い色とシルバーが近ごろの好みで、家具も少しずつシルバーに塗り替えている。

「透明感のあるもの、光をよく反射して輝くものが特に好きで、そういう意味ではシャンデリアのガラス玉も日本のあめも同じ」

ふと見ると、ベッド脇にヴェネツィアンガラスのミルフィオリに似た日本のあめや干菓子がたくさん。彼女の本にも登場するお菓子は、食べるためではなく仕事用を買ってきたもの。これも、祖母のものだったという銀のリキュールカップのセットや、カリブの海岸から拾ってきた珊瑚、フランスで見つけた木の枝、アンティークの鳥かごと並んで、キャロリンお気に入りの品なのだ。

「好きなものに囲まれていないと仕事も私生活も成立しないの。だから、以前仕事用にスタジオを借りていたときには、気に入りのものを毎日車に積んでスタジオに行って、また持って帰ってたのよ」

彼女の感性で選ばれた品々は独自の方法でミックスされ、新たな魅力をつくり出す。真っ白なミントのドラジェで満たされ、緑にはアンティークのイヤリングが下がるシャンペ



新しい 装飾の提案

去年の末に、パリ7区で行われた展覧会も好評に終わった。ロンドン在住のインテリアデザイナー、キャロリン・カルターメインのアトリエ兼アパートメントは、日当たりがよく、透明感のある白が基調の美しい部屋。

まず、部屋に入ると、見事に調和した簡素なインテリアと、豪華なテキスタイルのコントラストに魅了される。それぞれの家具の気品と、軽やかさを損なわずにさまざまな時代を組み合わせるといって、彼女の独自のスタイルを部屋の隅々からうかがい知ることができる。18世紀の、金色に塗られた木材の描くなめらかな

な曲線、テーブルの端正なライン、鉄製の椅子のアラベスク模様。床と壁の白さがその優美さを際立たせ、まるで空間に描かれたカリグラフィのようだ。

ロンドン王立美術学校で学んだ彼女は、グラフィックと名のつくものすべてに魅了されていて、サインもカリグラフィであるほど。彼女の素晴らしいカラーージュには、あらゆる種類の文書や活版印刷がまじり合っていて使われている。これらのカラーージュ作品が話題をよび、1986年彼女は初めての大きな展覧会をリバティーで開催し、ジョセフのインテリア部門と提携した。10年間続いているテキスタイルの仕事は、17世紀のフランス語の文書やモーツァルトの楽譜や詩の一節を使ったもの。文字そのものの美しさを重視している。鮮やかな色彩を使った時期を経て、

現在は優しくて繊細な色調に取り組んでいる。相変わらず、金色にはこだわり、光によく映えるシルクやサテンなどのお気に入りの素材も使っている。ロマンティックでもあり、現代的でもあるアーティストの感性で、彼女は布地をインスピレーションにしたがって変化させる。シルクに独特のモチーフを描いたアンティークの肘掛け椅子は、彼女にとってイヴニングドレスと同じくらい美しいものなのだ。

左上 キャロリン・カルターメイン独特のマテリアルの組み合わせ。ガラスの飾り玉とシルクのリボン、クリスマス・ツリーのオーナメント、イヴ・サンローランのアンティーク調イヤリング、サンゴの一枝をさまざまな形のグラスと組み合わせて“海底の宝石”をイメージ。

右下 金色の木製の椅子の上にはアンティーク・ショップで買ったボタンのサンプルと、刺しゅうのほどこされたアンティーク・シルク。左下 透明感のある淡いブルーで統一させて。シルク・タフタに包まれた英国風バンケット、'40年代のリボンの付いたダマスク風サテンのクッションとアラベスク模様のシルク・サテンの枕。



部屋に優しさを加えるため、アルコーブの壁はやさめのローズピンクに。ベッドの上にはスイス人の祖母から譲りうけた柔らかな羽毛布団、シフォン素材のガウンはアンティークのもの、シルバーのスリッドレスはシルク製、スツールはインド刺繍の布張り、17世紀の古文書から取られたカリグラフィーがプリントされているオーガジーのカーテン、クッションのブルーも見事に調和している。

